

小児科



① 小児科の紹介

愛媛大学小児科は、医学系研究科、附属病院、周産母子センター、小児総合医療センター、および感染制御部の5つの分野と、2次医療圏整備のための寄付講座および地域小児・周産期学講座、地域小児保健医療学講座から構成されています。また附属病院小児科病棟は、一般小児科病棟とそれに隣接する新生児病棟（NICU, GCU）および小児総合医療センター（PHCU）の3つから成っています。小児血液・がん、循環器、内分泌・代謝、神経・筋、腎臓、アレルギー、新生児など高度急性期疾患から慢性疾患に至るまで、多岐にわたる疾患について包括的医療を行っています。また、ECMO 適応症例などの高度医療も当施設で対応しています。

② プログラムの目的と特徴

小児科医は正常小児の成長・発達に関する知識が不可欠で、新生児期から思春期まで幅広い知識が必要です。さらに小児科医として必須の疾患をもれなく経験し、家族への説明と同意を得る技能を身につける必要があります。研修プログラムでは、「小児医療の水準向上・進歩発展を図り、小児の健康増進および福祉の充実に寄与する優れた小児科専門医を育成する」ことを目的とし、一定の専門領域に偏ることなく幅広く研修します。愛媛大学小児科は高度な専門医療に対応するため各専門領域に経験豊富な専門医を有し、さらに2次および3次の救急患者を受け入れる体制も整っているため、小児科医として欠くことのできない救急疾患の対応も研修できる施設です。また専門研修連携施設では急性疾患の対応と慢性疾患の初期対応を経験でき、地域の特性と病院の役割に応じてすべての領域にわたり経験できる体制です。

③ 経験目標

小児科専門研修は愛媛大学病院小児科研修プログラムに沿って研修が行われ、愛媛大学はその基幹施設になっています。基本的には、1) 2つ以上の施設で研修を行うこと、2) 地域医療にも貢献すること、が前提となっています（⑥参照）。

愛媛大学病院または専門研修連携施設（愛媛県立中央病院、松山赤十字病院）では感染症・内分泌代謝・血液腫瘍・アレルギー・腎泌尿器・循環器・神経各疾患患者を担当医として研修し、周産期センター・新生児部門で新生児・先天異常疾患を研修します。また他の専門研修連携施設（市立宇和島、県立今治、県立新居浜）では主として地域小児医療の研修を、また北九州市立八幡病院では主として小児救急の研修を行い、最終的に3年間ですべての小児領域で総合的に研修します。なお、2021年度より新たに四国こどもとおとなの医療センター（香川県善通寺市）でも研修を行えるようになりました。

④ 指導医や指導体制

血液腫瘍：江口真理子(教授)、石前峰斉(准教授)、森谷京子、加賀城真理、岩本麻友美、宮本真知子

感染症：田内久道(感染制御部長/特任教授)

循環器：檜垣高史(寄付講座教授)、高田秀実(准教授)、千阪俊行(寄付講座講師)、柏木孝介

新生児：太田雅明(寄付講座准教授)、渡部竜助、宮田豊寿、岩田はるか、井門ひかる
 神経筋：元木崇裕(講師)、城賀本敏宏
 内分泌代謝：濱田淳平(講師)、勢井友香
 アレルギー：西村幸士
 腎臓・膠原病：渡邊祥二郎



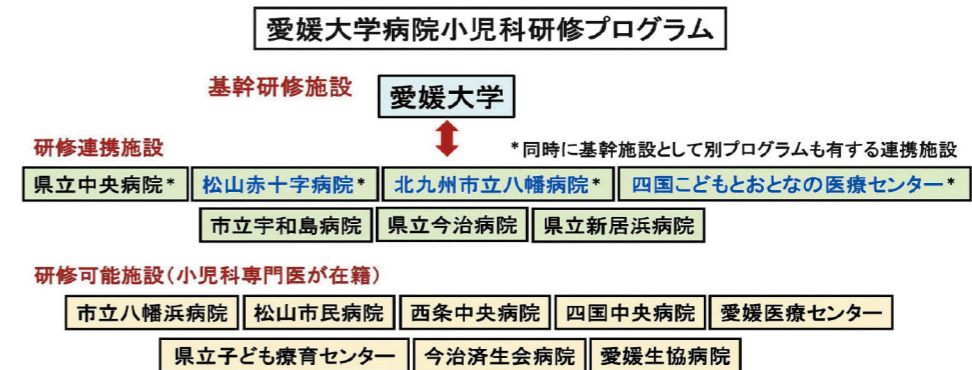
⑤ 研修に関する行事（週間スケジュール）

	月	火	水	木	金	土・日
8:00-9:00	朝カンファレンス（患者申し送り）					当直など
午前 (週1回外来)	病棟・ 外来	病棟・ 外来	症例検討 回診	病棟・ 外来	病棟・ 外来	
午後	病棟・ 周産期 カンファ	病棟	病棟 カンファ レンス	病棟	病棟	合同勉強会 (2回/年)

⑥ 新専門医研修プログラムについて

研修例を以下に示しますが、研修施設および期間は各専攻医と相談して決めます。

新専門医研修プログラムについて



⑦ 研修終了後

研修終了後は、小児科の各分野の専門医（サブスペシャリティー専門医）を目指して学内外の施設で研修を継続します。または大学院進学で学位取得を目指します。国内・海外留学も可能です。

2019年より研修医・専攻医を対象とした宿泊セミナーを開始！



⑧ 専門研修の問い合わせ

江口真理子（教授）、千阪俊行（専門研修プログラム担当）、濱田淳平（医局長）

TEL: 089-960-5320

e-mail: eguchi.mariko.my@m.ehime-u.ac.jp, chisaka.toshiyuki.lh@ehime-u.ac.jp, hamada.jumpei.yn@ehime-u.ac.jp

小児科ホームページ: <https://www.m.ehime-u.ac.jp/school/pediatrics/>